

BOOK Review

地域医療構想のデータを どう活用するか

評者 二木 立 日本福祉大名誉教授

本書は、医師・医療関係者が、日本の医療改革の柱になっている「地域医療構想」について正確に理解し、公開されているデータと自院のデータを実際に用いて、自院独自の施設計画・経営計画を立てるための必読書です。

全体は以下の6章構成です。第I章「地域医療構想の考え方」、第II章「厚生労働省の諸施策と地域医療構想」、第III章「地域医療構想におけるデータ分析の考え方」、第IV章「地域医療構想を踏まえた施設計画の考え方」、第V章「機能選択および病床転換の事例」、第VI章「日本医療の近未来図」。

本書の魅力は3つあります。第1は、地域医療構想の中身を、歴史的経過を踏まえて正確に理解できることです（主として第I、II章）。地域医療構想や「必要病床数」については、今でもさまざまな誤解や混乱がありますが、松田晋哉氏は、「医療区域」ごとの「必要病床数」を推計する計算式を開発した方であり、その記述は正確です。

第2の魅力は「データ分析」（量的分析）だけでなく、第V章で、困難な条件の中で機能選択または病床転換を断行した8事例について、現地調査を踏まえた「質的分析」も行っていることです。両者を統合した「混合研究法」により、地域医療構想を立体的に把握できます。私は、8事例のうち、6事例が広義の「保健・医療・福祉複合体」であることに注目しました。

第3の魅力は、第III、IV章を丁寧に読めば、自院の施設・経営計画を作成できることです。ここはやや歯ごたえがありますが、読者の多くは「理系人間」と思われるので、じっくり読み込み、併せて厚生労働省の最新文書も読めば、得るものは大きいと保証します。

私が最も感銘を受けたのは、松田氏の研究者としての誠実な姿勢です。特に「あとがき」（p.131）に書かれている次の記述には大いに共感しました。「地域によってはニーズの縮小が急速に進んでしまい、まさに撤退戦をいかに戦うかというような状況になっているところもある。そうした地域で頑張っている医療・介護の方々に、その場しのぎのような楽観的助言をすることはできない。（中略）研究者として、その場しのぎの軽々なことは言えないのである。事実を正しく伝えることが研究者の良心であると考える」。

もう一つ共感したのは、「あとがき」の最後の「新型コロナウイルス感染症と地域医療計画との関係」についての記述、特に「今回の新型コロナウイルス感染症の流行を契機として、地域医療計画、地域医療構想の本来の意義について、安全保障の点からも議論が深まることを期待したい」です（p.132）。この点は、できるだけ早く『病院』誌などで論じ、それを本書の「増補改訂版」に加えていただきたいと思います。

地域医療構想の データを どう活用するか

松田 晋哉

2025年まで、あとわずか。
地域ごとの実態に即した
医療提供体制の構築に向けた、
地区診断と施設計画のために。

医学書院

松田 晋哉 著

B5判／144頁／2020年／定価（本体3,500円＋税）／ISBN978-4-260-04252-9／医学書院刊